

## 遺族の立場から交通事故の絶無を願って

H・S

平成22年10月25日午前8時過ぎ、私は気の合う職場の仲間とレクリエーション旅行で青森県大間漁港にいました。その日の旅程を確認している時、妻から、次いで職場から立て続けに「18歳の誕生日を迎えたばかりの息子が、交通事故に遭って救急搬送された」という連絡を受けたのです。怪我の程度は、入院治療が必要になるだろうか、など私なりに多少の不安を感じていたところ、間もなく妻から「もう手の施しようがないらしい」という第二報が入りました。

新幹線で仙台に戻り、その日の夕方に病院に着き、見舞いに来てくれていた方々に挨拶もせず、すぐに病室に入ると医療器具に囲まれたベッドで息子は寝ていました。手を握り締めるととても暖かい。でも握り返してくる気配はありません。やがて医師から今後快復の見込みがないことを告げられ、言いようのない辛さや悔しさが押しよせ泣き崩れました。

心臓は動き、体の表面の擦り傷も少しずつ治っていく姿は間違いなく息子が生きていることを示しているのです。しかし、日に日に医学的データは悪化し、最も大切な、愛する我が子にやがて死が訪れるのをただじっと見届けるしかないのです。それが今日かもしれないし、明日かもしれない。想像を絶する生き地獄でした。

親としてできることがあるならなんでもしてあげようと思いました。腕が必要なら、私の両腕をあげよう。足が必要なら、私の両足をあげよう。目が見えなくて困るというなら、私の両目をあげよう。血液が必要なら、

私の体から一滴残らず抜き取って使えばいい。心臓が必要だというなら、私の心臓を使ってくれ。

お父さんの手を握り返してくれ。そう念じながら息子の手を強く握り締めても、やはり反応はありません。ほんの一瞬でいいから手を握り返してくれるなら、その一瞬のためだけに私の命と引き換えても構わないと感じました。それほど息子が今を生きていることを感じ取りたかったのです。

奇跡を信じて、「生きて欲しい」という多くの人の願いも叶わず、事故発生から十四日後に息子は旅経ちました。

悔しいです。

高校卒業を目前にしていた息子は、いろいろやりたいことがあったと思います。親としても、息子がこれから歩む人生に楽しみを感じていました。

それらが突然失われてしまったのです。

この交通事故の原因はとても単純です。自動車の運転手は仕事に遅刻しそうだったので、時速100キロの速度で運転したとのことでした。

交通事故の多くは身近な生活道路で発生し、防ごうとすれば、未然に防げるものです。

息子を交通事故で失い、私はたくさんのことを学びました。その一つが愛する人の犠牲を将来に無駄にしてはいけないという遺族の気持ちです。

現在の交通事故をとりまく刑事司法の側面では、個別に発生した交通事故の処理について、個別に原因を究明し、加害者の処罰、処分で収束します。それに、交通事故の原因と結果は、当事者間の問題として処理されています。

過去の尊い命の犠牲を無駄にしないためにも、交通事故の問題を人の生命に直接関わる社会全体の問題として捉え、運転免許取得年齢に達する以前に、交通教育の全てを完了させる体系の構築が必要ではないかと思えます。

免許取得時になって交通法規を学ばせ、違反点数制度や事故を起こした時の刑事責任、民事責任、行政責任のマイナス面を訴えて交通事故防止を図ろうとするのでは、悲惨な交通事故はこれからも繰り返されると思います。

命を大切にするという道德面が成熟した免許保有者が増えることで、交通事故による犠牲者は減少していくと思います。